

コレクティブハウスの軌跡に見る コミュニティづくり

文／宮前真理子（NPO法人コレクティブハウジング社副代表理事）

はじめの一步

私たちが日本で初めてつくったコレクティブハウス「かんかん森」の暮らしがスタートして2010年で8年になる。2009年の7月には4軒目のコレクティブハウス「大泉学園」が仲間に加わった。スウェーデンのコレクティブハウスを手本にして、日本での実現を目指していた11年前には、コレクティブハウスの考え方や仕組みが受け入れられるかどうかほとんど見当もつかなかった。手探りで住まい手を探し、住まい手が参加するワークショップ方式のハウス計画づくりを行い、さらに、住民が参加して自分たちの暮らしの質や作業の分担を決め、仕組みをつくって協力して運営するという、コレクティブコミュニティづくりを目指した。

すべてが初めてで、分からないことだらけだったが、住まい手が自立しているからこそ共に生きることがあり、共に汗をかくことで築かれるネットワークがまた個々人の自立や安心を支え、豊かに生きるという可能性を広げることになる「コレクティブの暮らし」に、未来の社会の一つの希望がはっきり見えたと確信した。

しかし、それから現在に至る間の、非婚化、高齢化、少子化のスピードは、世界的経済危機、経済格差の激化、派遣社員など不安定な雇用の増加などとリンクし予想を上回る速さで進み、無縁社会といわれるような厳しい孤立と不安の状況を生み、家族やコミュニティの崩壊を加速した。

この冊子のテーマである「超高齢社会と都市農業の危機」もこうした流れのなかにあり、コミュニティの崩壊が、豊かな暮らしの環境や都市農業の消失にも大きく影響していると思う。

私たちのお手本、スウェーデンのコレクティブハウス

手本にしたスウェーデンのコレクティブハウスは、1970年代の自由や人権の擁

護、民主主義、ライフスタイルの変革を求める世界的な流れを背景に、働く女性や環境問題に視点を置く居住運動を推進力として生まれたBIG（Bo I Gemenskap:＝コミュニティに住む）という名の建築やインテリアデザイナー、ジャーナリストなど職業を持つ10人の女性によって構成されていたグループが提唱した考え方で、「設備、空間だけでなく、住民が協力して作業を分担し、家事の一部を共同化することによって、暮らしを自分たちの手でコントロールし、暮らしの課題を核家族や個人に負わせるのではなく、コミュニティによって問題を解決しよう」というものであった。この提案は、1982年に『小規模コレクティブハウジング 実用モデル』という本にまとめられ、スウェーデン各地に広がった。実用モデルは『20～50戸の規模の集合住宅で、居住にかかわる日常的な仕事を居住者が分担・協働し、管理に居住者の民主的参加がある公的賃貸住宅であること、そして多世代、多様な社会層の付き合いがあること（小谷部育子日本女子大学教授）』を内容としており、BIGモデル、またはセルフワークモデルとも呼ばれている。

2002年夏、私たちNPOのメンバーと、かんかん森の居住予定者数人を合わせた11人がストックホルムへ出かけ、1980年代以降に建設された8つのセルフワークモデルのコレクティブハウスを見学。住い手や研究者の話聞き、暮らしの一部を体験するという機会を得た。当時、私は「かんかん森」のプロジェクト責任者という立場でもあったので、コレクティブハウスの空間や設備計画のもつ「人を中心に考える合理性」と「シンプルで心地よい暮らしの徹底した追及」、そして「多様なライフスタイルの存在」が強く心に残った。そして、各ハウスで出会う人々のオープンマインドで優しく丁寧な対応に『外に開かれているコレクティブハウジングコミュニティの清々しい精神』を感じ取った。

今回、写真でご紹介するクーポンは、その時初めて訪問したコレクティブハウスの一つである。

コーディネーターの存在

スウェーデンのコレクティブハウスづくりには、私たちのような推進を支援するNPOやコーディネーターは存在していない。スウェーデンの社会は1929年の世界恐慌のあと、人口激減という時期を経て、人を尊重する現在のような福祉国家を築いてきた。その過程で「他人と自分の関係」「社会と自分の関係」などについて、「すべての人を尊重するとはどういうことか」という視点をはっきりもつ国となっていたのだと思う。

高負担、高福祉の社会体制が確立されたのも、国民のそういう選択の結果であるだろう。コレクティブハウスのコミュニティも、住まい手自身が活動をしてつくられる。住まい手のハウスづくりの要請を公的住宅供給機関が受け、コレクティブハウスができる例もある。住まい手自らが選択し、活動するのである。それに引き換え日本の戦後社会は、コミュニティというものからひたすら離れ、核家族化、孤立化していく道を選択したといえるのではないだろうか。その過程で私たちは、コミュニケーション能力や、「他人と自分」「社会と自分」の関係を考える視点を失ってきってしまった。江戸時代の長屋の方がよほど助け合いや支え合いがあり、コミュニティとしての機能もっていたのではないかと思う。

現代日本の社会で快適なコミュニティをつくることはとても難しいことになってしまったようである。そういうなかで、私たちの役割は住まい手を支援し、孤立していく人々が生活の共同体を構成することで一緒に行動する機会を増し、「話し合い、考える」という機会と場を提供することである。その過程を経ながら、人間関係が個人から家族、そして仲間へと拡大し「他者と自分」「社会と自分」について考え、尊重され、尊重することの快適さを自分のものとして獲得するように励ます。そうした体験を得て初めて人々は信頼できるコミュニティを取り戻していくことができるのだと思う。コミュニティづくりのコーディネーターや支援者が継続的に存在することは世界のな



写真2



写真3



写真1

かでは特殊なことであるが、孤立化の進んだ日本では、しばらく私たちのような自立的なコミュニティづくりの支援者が必要だと感じる。

コレクティブハウスの コミュニティ

2009年5月、コレクティブハウジングの第1回国際大会がストックホルムでひらかれた。コレクティブハウスはアメリカやカナダにも広がり、世界18カ国から参加者があった。

「人が大切にされ自由で自立し、お互いが少しずつ支え合い合う暮らし」「血縁や性別、家族の形態を越えた人のつながり」「安心や安全や心のゆとりを大切に作る暮らし」こうした日々の何気ないこと、快適であることが人を柔らかくする。そういう意味で丁寧に暮らすことを求める人々が、人種や国を越えつながることを感じる事ができた。国際大会の初日に、参加者はいろいろなハウスのコモンミール(共同の夕食)に参加することができた。

私に割り当てられたハウスは、なんと8年前に訪ねたクーポンだった。クーポンは大きな団地の中のコレクティブハウスで、賃貸ではなく居住者は居住権を買って住んでいる。土地は分譲されないのが日本の区分所有とは違うが、各自が所有しているといっていだらう。変わらない外観でも、入口に入って直ぐのコモンダイニングルーム(写真1)は、リフォームしたばかりということで白い壁がまぶしく明るく美しくなっていた。キッチン

は最初からレストランの厨房のように高機能(写真2)。

ハウスができて24年経っている。「話し合いを重ねてこの明るい部屋になったのよ」と説明しながら一緒に食事してくれたアンナさんは8年前にもお会いした人だった。ハウスを案内してもらくと、子どもの遊ぶ場所がいろいろとある。大人たちが手作りした子どもの小さな部屋や元気に遊べる遊び場、豊かで賑やかな子育てをしているのが感じられる。同時に大人専用の少人数でのリビングルームも作られており、静に音楽や会話や映画を楽しむそうである。大人も子どもも、さまざまな楽しさや可能性をもつことを尊重し合うコレクティブコミュニティの姿を、まぶしく、力強く感じた訪問であった。

コレクティブハウスをつくらう

5月のストックホルムは桜が咲きようやく春を迎えたところ。友人が自分の自慢のコテージに招待してくれた。小さな農地と小屋がついた貸し農園で野菜や花を育てたり、収穫して一緒に食べたり、戸外で過ごすのが多くの人の楽しみだそうである。都会のバス通りからちょっと入った入り江の見える斜面には、たくさんの小さな農地が並んでいる(写真3)。ハーブや野菜はコモンミールで食べることもあるそうだ。

日本では、かんかん森の他に「コレクティブハウススガモフラット」(2007年入居)「コレクティブハウス聖蹟」(2009年入居)そして「コレクティブハウス大泉学

園」(2010年入居)の3つがあり、居住者が自主管理し暮らしを運営している。

どのハウスもコレクティブハウスとしての基本は同じ、菜園やガーデニングも盛んである。しかし、小さな庭のような農地を守り楽しみながら耕作して暮らすハウスはまだない。高齢で農業が続けられなくなった農家、後継者がいない都市の農家を、農業を楽しむコレクティブハウスの住民が支援し、地域の豊かな環境を継続していくなどということも、コレクティブコミュニティならできそう。コレクティブハウジング社の居住希望会員となって新たなハウスづくりを目指している居住希望者は現在80人余り。地域とつながりながら緩やかなネットワークをもち、安心して暮らしをつくっていききたいと考え、共に事業をしてくれる大家さんや地主さん、事業者を募集している。

高齢者だけでなく多様な世代、多様な人が「つながる仕組みを持ったコレクティブコミュニティ」であればこそ、地域も都市の農地も再生する力にもなれるかもしれない。

● 著者プロフィール ●

日本女子大学家政学部住居学科卒業後、1978年(株)コミュニティ企画研究所に入社。1998年アトリエエスバス一級建築士事務所を設立し独立。「新しい住まい、暮らし方としてのコレクティブハウジング」を広め、実現を目指して活動し現在に至る。2001年のNPOコレクティブハウジング社(CHC)設立のメンバー、現CHC副代表理事。日本で初めての賃貸コレクティブハウス「かんかん森」(2003年)はじめ「スガモフト」(2007年)「大泉学園」(2010年)のコーディネーターおよびプロジェクト責任者。2007年より東京造形大学非常勤講師。関連書籍:『コレクティブハウジングで暮そう』(共著/丸善)